The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポピュラー文化のグローバリゼーション : 大衆の空間的拡大と外国イメージ形成への寄与
Author(s)	藤田, 智博
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50457
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式3

論　文　内　容　の　要　旨

〔題　　名〕ポピュラー文化のグローバリゼーション　―大衆の空間的拡大と外国イメージ形成への寄与―

学位申請者　　藤田　智博　　印

本稿はポピュラー文化のグローバリゼーションをどのように捉えるのかについて社会学的に考察したものである。第1章「ポピュラー文化研究とグローバリゼーション」においては、ポピュラー文化や大衆文化研究においてグローバリゼーションが提起する課題として、それまで一国の範囲にあった、文化の担い手としての大衆を空間的に拡大するのか否か、また、それまでアメリカ主導であったポピュラー文化や大衆文化の国際的な流通とは異なるタイプの国際的な流通によって新たな価値観が形成されるのかどうか、といった点があることを指摘した。これまでの先行研究はこれらの点を概ね支持しているものの、実態の把握以上に現状の批判、限られた受け手の分析による一般化の限界、また、実態の分析以上に言説の分析に力点があることから、個々の記述的な研究に終始しがちであり、改めてこの問題について考察しなおす意義があることを確認した。

第2章「文化のグローバリゼーションの理論とポピュラー文化の位置―異質化と均質化の対立の再考を通して―」においては、ポピュラー文化のグローバリゼーションについて理論的に考察した。これまでの文化のグローバリゼーションをめぐる学説において、とりわけ文化的な均質化と異質化という対立の中で、ポピュラー文化や大衆文化がどのように扱われているのかを検討しながら、ポピュラー文化や大衆文化研究への含意を引き出していった。文化の一形態であるポピュラー文化や大衆文化は、グローバリゼーションによって、文化と場所との自然な結びつきを緩めるような作用をもたらす可能性があり、それが価値観形成に寄与している可能性がある。また、私たちの単線的な時間感覚に対して亀裂を入れるような側面があることも指摘した。他方で、その流通においては、アメリカの覇権が無視できないという意味において、いかにして、ポピュラー文化や大衆文化のグローバリゼーションのなかでアメリカ的な価値観が乗り越えられるのかも論点になることを確認した。

第3章「独立系映画ファンのネットワークがもたらした複合的連結性―分衆の空間的拡大とアメリカ依存―」では、独立系と分類される映画ジャンルのファンたちが、インターネット上に形成したコミュニティを取り上げた。ポピュラー文化のグローバリゼーションを考察する上で、アメリカが有する影響力は大きい。中でも代表的なものはハリウッドの映画であるが、それとは逆に芸術性や実験性を重視したジャンルが独立系である。この章では、その独立系のファンたちのインターネット上のコミュニティにおいて、成員の範囲がグローバルにわたっており、その特性を活かしたコミュニケーションが行われていることから、今日的な分衆の空間的拡大と集まりが成立していることを明らかにした。他方で、アメリカの影響も無視できないことを指摘した。第4章「サッカーのグローバリゼーションが示す文化的多様性とその背景―サッカー移民の分析とアメリカの位置―」においても、グローバルな範囲で人気のあり、アメリカの影響力の相対的な低さを示している大衆文化であるサッカーにおいても、アメリカの果たしている役割があり、なぜそういった点が理解されないのかについての考察を行った。

5章「冷戦体制崩壊後の日本人の外国への選好の変化―親米意識へのメディアの効果に着目して―」においては、冷戦体制崩壊後の日本人の外国の選好について、多変量解析を用いて分析した。その結果、アメリカは日本人がもっとも親しみを感じていた国であること、その比率は、2000年代に入って、低下傾向にあるものの、日本人が親米である事実を否定することが難しいことを指摘した。とりわけ、ポピュラー文化や大衆文化が果たす役割について、教育年数や日常生活における外国人との接触がアメリカへの選好を低めているのに対し、欠かせないコミュニケーション行動としてテレビを不可欠であるとしている層において、アメリカへの選好が高まることを指摘した。これらの考察は、確かに、1990年代以降、ポピュラー文化や大衆文化のグローバリゼーションがアジア地域においても進み、ポピュラー文化が有する価値観形成への可能性に期待がこめられたものの、そういった効果が限定的であることを明らかにするものである。今後も、ポピュラー文化のグローバリゼーションによる分衆の空間的な拡大が生じることが予測される中、そういった過程において、ポピュラー文化や大衆文化が担う役割について注視していく必要がある。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　藤田智博　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	教授	牟田和恵
	副 査	教授	友枝敏雄
	副 査	准教授	辻　大介

論文審査の結果の要旨

本論文は、ポピュラー文化のグローバリゼーションを社会学的にどのように捉えるのかという問題意識から、ポピュラー文化や大衆文化のグローバリゼーションを主題として社会学的考察を行ったものである。とくに着目しているのは、グローバリゼーションによって、それ以前とは質的に異なる大衆や受け手が誕生しているのではないかということ、そして、これまでポピュラーカルチャー・大衆文化はアメリカナイゼーションを含意してきたがグローバリゼーションによってアメリカ主導ではないポピュラー文化の国境を超える移動流通が起こるなかでアメリカの覇権が揺らいでいるのかということである。

まず第1章で、ポピュラー文化や大衆文化のグローバリゼーションに、歴史的な新しさが認められるならば、アメリカとの関係において議論を進めていく必要があることを示唆し、送り手中心から受け手中心へとポピュラー文化や大衆文化をめぐる研究の力点が移行していく中で、アメリカの影響力の大きさがうまく捉えられていないのではないかという問題が提起される。第2章においては、文化のグローバリゼーションをめぐる学説史においてしばしば登場してきた均質化論と異質化論との対立を取り上げ、ポピュラー文化や大衆文化のグローバリゼーションとアメリカとの関係をめぐる議論への含意をどのように引き出せるのかを考察している。異質化論においてアメリカは、移動する文化のなかの一通過点として、大衆文化の流通における商品として、改変可能な文化のアーカイヴの所有者として捉えられ、他方、均質化論においては、アメリカは消費生活様式の伝播者として、そして、文化帝国主義理論においては、支配者として捉えられてきた。そういった中で、受け手のコミュニケーションにおいてこそ現れてくるようなアメリカに焦点を当てるべきであることを論じている。

第3章・第４章では、１・2章の理論的整理に基づいて、具体的なポピュラーカルチャーの事例として、ハリウッドメジャー映画ではない独立系映画ファンのインターネット上のネットワークと、反アメリカ的なイメージを持たれているサッカーを取り上げ、文化的多様性を反映したように見えるコミュニケーションの環境や、必ずしもアメリカを経由しないサッカー移民においても見られるアメリカの技術や資本の深い関連を論じている。

第5章では、日本人の外国への選好の変化に着目、アメリカ以外への国の選好と関連する要因を分析し、ポピュラー文化や大衆文化研究への含意を引き出している。第6章では結論として、ポピュラー文化や大衆文化のグローバリゼーションにおけるアメリカの問題は、覇権・均質化としてではなく、「遍在性」という観点から捉えるべきであることを指摘している。

本論文は、今や各国で経済的資源としてだけでなくソフトパワーとして政策的重点の置かれているポピュラーカルチャーに焦点を当て、「受け手」に着目することで、グローバリゼーションに伴いポピュラーカルチャーの多様化が生じているというこれまでの議論に一石を投じている。また、いっけんポピュラーカルチャーとは異質の日本人の外国観に関する通時的データを活用することで、ポピュラーカルチャーそれ自体にのみでなく、社会のなかのさまざまな経験の中でポピュラー文化や大衆文化を捉えていく必要性を論じている点でオリジナリティがうかがえ、当該分野への貢献となっている。

以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。